

多様な課題をもつ子どもと共に育ちあう学級経営を考える 一人ひとりの自己表現を互いに受けとめ受け入れていく関係づくり

4歳児（たんぽぽ組）担任 岡崎 由美子

はじめに

本学級は3歳児からの進級児9名と4月入園の4才児25名を含む計34名からなる混合学級である。学級経営にあたって、子どもたち一人ひとりの固有な発達を大切にしていきながら、一人ひとりの考え、思い、気持ちを素直に表現していけるように、子どもたちとの心の絆を深めていくことに努めた。一方、聴覚障害を持つ子ども、自分の固有な世界で模索していこうとする子どもなど、実にいろいろな子どもたちが日々の保育生活を楽しんでいる学級でもある。このような中で、本園の教育課程である8期後半から10期において、学級の子どもたちが、いろいろな人の中で生活しているんだということを自覚しつつ、ささやかな思いやりの気持ちや、それらの姿を垣間見せ合いながら日々の遊びを創りだしていった。

子どもたちはいろいろな体験や経験をしっかりと自分の中に溜め込んで、「きもちの一つ、心はハート」の心情・意欲・態度を共有していこうとした。保育者はこのような子どもたちの姿を受けとめ、受け入れていながら、一人ひとりが互いの持ち味の良さを認め合って生活していけるように環境の構成、及び個別的な援助をしてきた。

ここでは、そうした子どもたちの「一人ひとりの自己表現を互いに受けとめ受け入れていく関係づくり」が、どのような過程をたどってなされてきたのか（8期後半から10期）生活の記録から抜粋し、分析していきたいと考えた。

・以下、事例文中の幼児名はすべて仮名である。

I、 実践事例

事例1、A児と学級の子どもたちとの関わりを追って

(1) 児の特徴・特性

朝、登園してきても自分の持ち物を自分のロッカーに掛ける事がなく、その場所が違う事がほとんどであったり、保育室の入り口に無造作に放り投げられたりすることが常であった。降園前の集まりにおいても全く振り向こうとせず、自分の意のままの動きを好んでいく毎日が続いていた。したがって、このころは母親が降園前になると保育室の廊下で待機する姿が見られた。

①6月に入り、保育者が「おはようー」と、声を掛けると声だけは「おはようー」と、返ってくるようになる。②6月末になると、勢いよく保育室に入り、感覚でカバンを掛けて飛び出していく。「カバン掛けるところがちがうよ」と、伝えると振り返って自分のロッカーを探し

かけ直す。また、気が向くと、丸テーブルの場に行き、シールを貼る姿が見られ出した。③7月に入り、今まで休んでいた同じマークのあき子が登園してきたことをとても喜び、A児に「あき子ちゃんがきたよ」と伝えると、瞬時に事務室から飛び出していき、自分の部屋に帰っていく姿も出てきだした。④誕生日会のように、幼稚園のみんなが参加しての場で、保育者が抱っこをしていれば、その時間をみんなと共に同じ場で参加していこうとする思いや姿も感じられるようになった

この時期に見るA児の行動と特徴

- ① 自分だけの居場所を探し求めていこうとする
- ② 製作物にこだわりを見せながら、好んで創ったり描いたするが、それらに固執する姿はほとんどない。その場に放置したままのことが多い。
- ③ 気に入らない事があると周りの人を手当たり次第に叩いていく。
- ④ ほんの些細な事でパニック状態になり、大声で泣き出す。
- ⑤ 「なんでー」「どうしてー」「かいちよいてー」など、独特の言い回しの言葉を好んで使う。
- ⑥ 自分がしてはいけないことへのこだわりを所かまわず×印で示していく。

(2) マークへのこだわり

7月に入り、(8期の半ば) A児と同じマークのあき子が登園してくるようになった。そのことを事務室に居るA児に伝えた時、嬉しそうに、自らの行動で保育室に飛んで帰る姿があった。何も言わないA児ではあったが、自分の“おとなりさん”への思いは、一つのこだわりとしてA児の気持ちの中にいつもあったということ。その日から、A児は「あき子ちゃん」を見つけると、とても嬉しそうに抱きついていき、集合時にもA児が勝手な場において保育室に入つて来ないとき、あき子が声を掛け迎えに行くと、一緒に帰って来るようになった。

♥ A児があき子によって学級の中に入ってくる姿を見て、子どもたち一人ひとりみんなが認め、感じていこうとしていた。

(3) アンパンマンの歌

あき子の姿を見つけると抱きついていくA児であったが、みんなが集合する場には、それでもなお、こだわりを持ち、たとえあき子が呼びに行っても、なかなか帰って来ようとしない時もあった。そんな時、学級の子どもたちは我先にと呼びに行こうとし、自分たちで連れ戻そうと試み出して行った。「アンパンマン」の絵を沢山描いていた事を思い出し、その曲をピアノで弾き、みんなで歌おうと考えた。そして、あき子やまなぶの誘いかけも功を成しながら、A児が素早く反応を示してきた。保育者の弾くピアノの横でじっと楽譜を見つめるA児の姿があった。次第に、片付けの後や集合時に「アンパンマン」の曲を弾き出すと、何処からともなくA児が保育室に帰ってくる姿が頻繁に見られるようになった。そして、ピアノの椅子の上に立ちながら、「どうしてアンパンマンひくのー」と、不思議そうな表情をして見つめていた。

♥ 登園するものの、自分の学級以外の場で(他学級や廊下、階段の踊り場)描いていた絵

を、自分の学級で、騒然としたその中で描いている姿を見ることができるようになった。今までもA児が描き、放り投げていた絵を拾っては保育室の壁に貼り付けていたが、A児がみんなの中で描く事で、今まで以上にA児の存在を学級の一人として、感じていこうとする子どもたちでもあった。例えば、片付けの時に床に投げた絵を保育者が拾い上げ「これはだれのー」と、高く示すと、「Aくんのー」と、子どもたちの反応や、集まりの場で一瞬にして、「Aくんがいない」と、知らしあう声が聞こえるようになってきた。

8期後半（9月5日）より学級で大切にしてきたこと

○運動会に向けての話し合いの場から

二学期を迎えた日、子どもたちは互いの顔がしっかりと見渡せるようなとても気持ちの良い円座になって集まった。一人ひとりの子どもたちが夏休みの間に心身とも大きく成長し、たくましくさえなったこの姿を、保育者は「たんぼぼさんの気持ちが一つになったんだね」と、嬉しさを表現し伝えていった。

「気持ちってね、みんなのここ（保育者が自分の胸に手をあてて）にあるけどしっているかなー」

「気持ちって、ハートのことだよ」

「しってるよー、あのね、ハートってねー、一つしかないんだよー」

「そうそう、ハートって、一つしかないんだよね」と、しおりの言葉に呼応しあっているお子たちの嬉しそうな、得意そうな顔。

「せんせー、こころは一つだよー！」

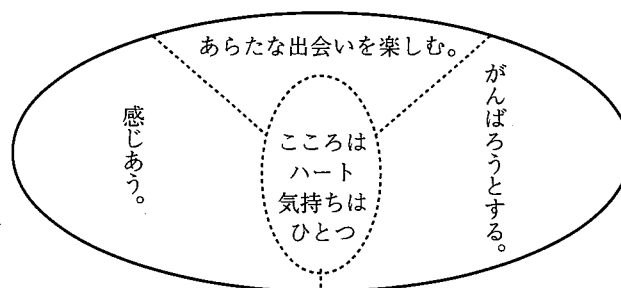
「そうだよねー、こころはひとつだよねー」

「うん！そうだよー、わたし、しってるよー、あのねー、こころは一つっていうことは、こころはハートって！」

「そう！素敵な言葉だねー、心はハートなんだねー」と、保育者は子どもたちのその言葉を反復しながら、言葉のもつ余韻を伝えていこうとした。子どもたちも「うん！、こころはハートだよねー」と、隣り合わせに座りあう互いの顔を見合い、満足そうに頷き合っていた。

○この時期学級で大切にしてきた心情・意欲・態度

表1



(4) 課題活動をとおして—みんなの中にいる自分の存在を認識する

子どもたちが毎日がんばって幼稚園に通うことに対して、母親たちからのプレゼントと称しての「お楽しみ会」が企画された。母親から子どもたちへのプレゼントであったが、いい機会でもあるし、子どもたちと相談した結果、「てぶくろ」の劇遊び(寸劇)を披露することにした。

○学級の課題活動—劇遊びのプロセス

- ① 「てぶくろ」の絵本を保育者から読み聞かせてもらう
- ② 役を自分たちで決めていく
- ③ 役のお面作りを楽しんで取り組む
- ④ 役の音を感じ取っていく
- ⑤ 自分が選んだ役をその音に合わせて自分なりに表現していく
- ⑥ カラー積み木を「てぶくろ」の家に見立てていき、身体を思い切り動かして役になりきっていきこうとする
- ⑦ 役の音をしっかりと感じながら身体で表現し、友だちの動きもしっかりと感じ取っていきこうとする
- ⑧ 「てぶくろ」の中で待ちながら、逃げて行くおもしろさをや期待感を持ちながら演じる楽しさを感じあっていく

♥12月に入り、急に寒くなって来た朝、登園してた子どもたちはシール貼りの場で、この冬初めて手にする手袋を見せ合い賑わった。「ほらっ！」と、赤い手袋を見せてくれたしおり。「ほくねー、てぶくろのおはなしのほん、おうちにもってるよ」と、しおりが広げたその赤い手袋を見て眩いたじゅんの、“てぶくろのお話し”の本を、みんなとしたら楽しいだろうな、と考えた。とても単純なストーリーではあるが、子どもたちなりの面白さをその都度感じ合いながら、この時期の子どもたちなりのかかわりの中で、楽しんでいけるのではないかと思った。

(5) A児と劇遊びのかかわり

回数もなく、わずか3回ばかりの練習ではあったが、そんな中でA児は①全く保育室に入っていない②集まるもののすぐ廊下に出て行く③集まっている子どもたちの隣に座るが、いつのまにか保育室から廊下に出ていく。

♥クラスみんなの姿を見てもらいたいという保育者の願いでもあったが、A児をどのような姿でみんなと同じ“劇”遊びの中に参加していくと良いのか、ずいぶん考えた。保育者はお爺さん役とお話の展開、ピアノで役のイメージ音を出していった。

(6) 保育者とA児への配慮

なんとかA児をこの遊びに参加させていきたいと考えた。その手立てとして、保育者が“いぬ”のお面を作った。絵の得意なA児が、保育者の作ったお面にどんな反応を示してくれるのか、内心ドキドキしながら当日の朝を迎えた。「Aくんのお面作ったよ、先生はお爺さんになって出るから、Aくんはいぬになって先生と一緒に手袋探しにいくんだよ」と、A児に話し

た。「Aくんのいぬのお面、先生が作ったからね、破れるといけないからピアノの上においてあるからね」と、みんなと一緒にこの遊びをすることを伝えていった。

しばらくすると、「せんせー、Aくんがー、ピアノのうえのおめんをおとしているよー」と、子どもたちが叫んできた。A児は、自分の“いぬ”のお面に興味をもったのか、一生懸命探し出そうとしていた。

「Aくん、どうしたのー」と、尋ねる保育者に向かって、A児は不思議そうな、弱々しげな顔を向けて「いぬのおめんはー？どこにあるー」と、呟いた。

♥みんながどうして騒いでいるのか全く知らない、という表情を保育者に向けるA児。保育者がお面を被せると、嬉しそうに廊下へ走り出て行った。周りの子どもたちも、そんな屈託のないA児の姿を見守っていた。

(7) お面への関心とかかわり

お楽しみ会で子どもたちが次々に自分たちの役を演じていく中で、いぬのお面が気に入ったA児はカラー積み木で組まれた「てぶくろ」の家をまたいでその場を陣取り、学級の子どもたちが演じきっていく過程をじっと見届けようとしていた。お爺さんが手袋を探しに行く場面では、動こうとしないA児を保育者が身体ごと抱え、一緒に「てびくろ」の家までたどり着くという光景もあった。それでもなんとか、「みんなと同じ場」で、「同じテーマ」の、意識の中で活動をしていくことができた。

♥A児の動きに対して、参加し演じている学級の子どもたちがA児のそんな姿に対して、不満を言うことなく、自分たちと一緒にしていくその姿を素直に、自然に受け入れていこうとした。そして、保育者が「Aくん、わんわんって大きな声でみんなにいつてあげて」と言うと、瞬時に「いやー！」と、大きく叫び抵抗を示したA児。A児の代わりに保育者が演じていくことで、手袋の家の中で“その時”をじっと待っていた子どもたちは、楽しそうに逃げ惑い、もとの自分たちの場に帰って行こうと大急ぎで走った。そんな楽しそうな歓声と動きに混ざりながら、A児も共に逃げ惑い、みんなと一緒にの場に寄り集まって行く姿があった。

事例2、「こま」の遊びで広がった仲間関係と意識

1、「こま」の遊びが楽しく展開するための環境の構成と保育者の援助

「こま」の遊びが次第に加熱していきだした頃、毎朝登園し、シールを貼り終えた子どもたち自ら、「こま」を手にし回し始めていきだした。しかし、その姿はある子どもだけに限られているように感じた。子どもたちのそんな姿から、学級のみんなが「こま」に触れ、自分でこまの感触を味わっていくことが出来ると良いと考えた。

(1) 学級のみんなが「こま」を楽しむために大切にしたこと—糸巻きの方法

1月25日／ほし組から「こま」を貸してもらおう事でクラス全員が自分の手で「こま」を握ることができた。

保育者が意図的に大切にしたこと

① しっかりと左手に（自分の利き手）こまを握る事② 糸巻きの糸を持つ位置の確認③ こまに掛けた糸の付け根を「ぎゅー、1、2、やさしくやさしく」と、唱えながら、子どもたちは自分が握っているこまに真剣な表情を注ぎ、巻いては解き、巻いては解き崩れていく自分の糸巻きに、なおかつも食いついていきながら、次第に夢中になっていく子どもたちの姿を見ることができた。一方、四苦八苦しながらも、一人ひとりの子どもたちがそのことに夢中になっていく中で、A児は一人、勝って気ままに教材置きBOXに手を伸ばしながら、クラスみんなが今していることなど、ましてや「こま」のことなど全く関心がないといった表情をしながら独自の行動を続けていた。

(2) 個別的配慮—A児への援助

子どもたちが保育者の助けを求めなくなっていった段階を見計らいながら、A児にも「こま」を持たせて糸巻きをしていくことを試みた。

A児自らがしていくためにまず、「こま」を持って立つ姿から始めていかなければならなかった。

Aくんの“こま”がまわった—

A児が自分で四苦八苦ししながら糸巻きしたその“こま”を、少しばかり足を広げて立たした保育者は、A児の手に添えながら一緒にこまを投げ放った。その瞬間、円座になって座っている子どもたちの目の前にA児の“こま”が落ち、回っていたのだ。思わず「まわった—」と、感嘆な叫び声を上げながらも、「あれ?! どうして」と、いった顔をA児に向けた子どもたちの不思議さも感じられたのだった。そして、それが次の瞬間、A児に向けての拍手になっていった。

♥みんなからの思いがけない拍手を受けとめながら、保育者が「Aくん、“こま”まわったよ—」と言うと、A児は「できん」と、ぶっきらぼうに“こま”の回る姿を見つめて言った。保育者がA児の手に手を添えて一緒に回したことで、自分だけの力で回ってないと感じていたのかもしれないと思った。

2、こま回しから発展していく遊びと新しい友だちとのかかわり

(1) ゆき子とこうきの白帽子

今までほとんど遊びや活動の場のかかわりをもつことのなかったゆき子とこうきであったが、2月5日に、こうきがこまを回しているのを担任が見守っていると、あき子もこまを回してみるといい、そのこまを勢いよく投げていった。しかし、その“こま”は、床に転がってしまった。拾い上げては投げ、また投げていく。そんなゆき子の姿に、「おい、オレがおしえてやろうか」と、近くで投げていたこうきが、ゆき子の顔を覗き込むようにして言った。ゆき子は、口を尖らせ興奮交じりに、「このあいだまわったに—、ゆき子ね—、おうちでおとうさんに、こま、おしえてもらったのに—」と、呟いた。が、ゆき子はこうきもこの間までは全くこ

まを回せなかったことや、練習して回せるようになった事。そして、ようやくみんなの前でお披露目のできた事を知った。「よーし、ゆき子もがんばってれんしゅうしょーっと」と、いつものゆき子とは少し違っている、とても張り切った声が聞こえた。何回も何回も投げ放っていくゆき子の真剣な表情や眼差しが“こま”に注がれていた。投げれば投げるほどに、命中率も高くなってきた頃、「こうきくん、いっしょにしょー」と、ゆき子がこうきを誘う声が聞こえた。「いいでー」と、即座に呼応していくこうき。「いくぞー！」と、張り切るこうきの声に、その周りで投げ合っていた子どもたちが二人を取り囲むように見守りながら一斉に、「スリー、ツー、ワン、ゴー！」と、掛け声を掛け合っていた。息もぴったりあった“こま”仲間の元気な声が保育室いっぱいに響いていった。

(2) 意欲をもつことの大切さ—やり遂げていこうとするゆき子の気持ち

このように、「回ったからもういい」と、言う短絡的な気持ちから、回ったのだから今度は自分より先に格好よく投げているこうきに対して、自ら積極的に声を掛けていったゆき子は、今までの自分の投げ方よりもっと格好いい投げ方に挑戦し、試みようと思気込んでいった。回すほどに、その命中率も高くなっていくことや、その間に、あらたな“こま”の発見をしていく自分に気づいたこと。そして、今まで感じていなかった遊びに熱中する事のおもしろさや楽しさへの気づきをしていきたのだった。

(3) 「こま」から派生していく仲間関係—だんごづくり

一日の生活の全てを「こま」と向き合い、そして、その「こま」を媒介にしながら、新しい友だちを見つけて、すっかり意気投合していったゆき子とこうき。初めて一緒に食べたお弁当。昨日まで一緒だった友だちと離れたゆき子は、こうきのシートに並べて自分のシートを敷きながら、一つひとつ教えてもらえるその嬉しさが身体中から溢れている様子だった。

「おい、おべんとうたべたらだんごつくろうなー」と、ゆき子に誘い掛けるこうき。「いいでー」と、呼応していくゆき子。早々に食べ終わると、喜び勇んで築山の方に走っていく姿があった。そんな二人を、こうきの団子仲間が取り囲みながら、だんごづくりが始まっていった。赤土山から花壇の黒土に、そしてまた、赤土にと、こうきについて移動していくゆき子の嬉しそうな姿。だんご仲間もそれぞれに作っただんごを手にとり走りながら移動して行く。ゆき子の帽子がいつのまにか白色に変わっていた。

(4) 白帽子へのおもい

こま回しから意気投合していったゆき子は、こうきとその仲間と共に赤土山のだんご作りに夢中になっていった。

降園前の集まりで、保育者がゆき子のそんな姿に言葉を掛けると、「ゆき子ねー、こうきくんとおともだちになっちゃたー、えへへへ」と、照れ笑いしながら、自分の近くの友だちに伝えていこうとした。「だってねー、ゆき子、こうきくんにごまおしえてもらって、いっぱいできるようになったもん！だから、おともだちになったから、それでこうきくんといっしょのしろぼうしにしたんだー」と、弾んだ声で告げていった。そんなゆき子の言葉を聞いたクラスの

子どもたちは、「ぼくだってこま、まわせるもん!」「わたしだって、まえからまわせたよー」と、言い合いながら、ゆき子に負けまいと一斉に白帽子にひっくり返し始めた。そして、一人ひとりの子どもたちはそんな自分たちの姿が嬉しそうでもあった。

♥たんぽぽの学級帽子を白色にかぶり直した子どもたち。学級の一人ひとりの子どもたちが共有しあう“こま”への挑戦とがんばりの気持ちが、こうした自らの意思で互いの帽子をひっくり返して裏返しの白色帽子になることで、たんぽぽという学級の枠の中ではなく、子どもたちが今、感じあう一人ひとりの気持ちとなって表現していこうとしているように感じ、受けとめていく事ができるのではないだろうか。そして、このような場面が、これまでも廊下でのほしりっこ(5月29日)の場面でも確認していた。

3、「こま」の遊びで繋がったA児と学級の子どもたち

(1) A児の姿と保育者の配慮

クラスの中で過ごす事が多くなってきたA児は、自分にやさしくしてくれる女の子を見つけると、自ら抱きついて行き、とても嬉しそうなお表情を見せるようになった。そんな姿に保育者は、「Aくん、お名前を言ってあげてからでないと、女の子はびっくりするよー」と、声を掛けていく日が続いた。そのような繰り返しの日々の中で、保育者がA児に声を掛けると、A児はすぐに女の子から離れていくことに気がついた。そして、自分が抱きつこうとする女の子の洋服の名前をきちんと確認した上で、「まきちゃん」と、声を掛けながら抱きついていたりする場面も見ることができた。また、抱きつかれて困っている女の子には、「Aくん、遊ぼう、って言ってあげてごらん」「こまして遊ぼうって、いってあげてごらん」「Aくん、おはよーって、いってねあげてね」と、その都度、その場面や状態を見聞き合わせながら言葉掛けをしていくことを大切にしてきた。

(2) 「こま」を媒介にした、クラスの子どもたちへのかかわり

2月5日／

丸テーブルになんともたれかかっていたまき子に自分でこまと紐を持って、まき子に差し出す場面があった。まき子は笑顔でA児からこまと紐を受け取ると、糸巻きをしていった。そして、そんなまき子の姿を見届けながら、嬉しそうに廊下に出て行った。

2月6日／

つき組のお店で遊ぶ事に関心を持ち出していったA児が、紙で包んだ二つの品物を嬉しそうにしなながら、保育室(たんぽぽの部屋)に持ち帰ってきた。「はい、せんせー」と、両手で差し出ししながら保育者にその品物を手渡してくれた。「Aくん、これどうしたの」「やすかったから、かってきたんだよー」「それで、せんせいにくれるの?」「うん!せんせいにプレゼントするから、やすかったけんかったのだよー」と、そのお店のイメージを思い描き出そうとしながら、にこにこ笑顔で話してくれた。

2月8日／

砂場で遊んでいるあきら、しゅうじ、たけお、じん、まなぶ、みつる、のりお、こうき、など、自分のクラスの仲間と同じ場に、意気揚揚と走りながら駆け寄っていったA児。スコップを持ち出してきて、みんなの中で同じように穴を掘り出していった。そんなA児の姿に、自分たちの手を止めてしばらく見守っていくがくほの姿があった。そして、「あっ、そこはほったらだめー」と、のりおやみつるに叫ばれながらも、自分の動きに専念しながら少しも動じないA児だった。そんな言葉のやりとりを聞きながら保育者が「一緒にさせてあげてよ」と、子どもたちに伝えると、「だってねー、Aくんは水が流れてしまうようにほるんだもん、ぼくたち、せっかくなかためていこうとしてほっているのに」と、まなぶが怒ったように、少し膨れっ面の顔を見せながら呟いた。一方、そんなことを言いながらも子どもたちは、A児が自分たちの砂場において、そして同じような事をしていくことにさほどの抵抗はしなかった。そんな中でも何を言われようが、黙々と穴を掘っていくA児であった。

またこの日、かず子が「Aくん、いっしょにおべんと一たべよー」と、初めて誘った。カバンを持ちながら、かず子やその友だちの動きについていこうとするA児の姿があった。そして、かず子がシートを忘れた事を保育者につぶやいてきた事から、「Aくん、かずちゃんがシートを忘れたからAくんのシートと一緒にすわらせてあげてー」と、伝えていった。A児は返事をしなかったが、自分のシートを敷くとかず子が座れる空間を取って座った。同じシートで友だちと食べる事も初めてのことであり、同時に、A児にとって自分のクラスの友だちと互いに向き合って食べる事も初めての経験でもあった。

♥その後A児は、しおりやあき子と向き合って「こま」に、興じていく姿を見せるなど、クラスの仲間として迎え入れられている事を、A児なりの気持ちの心地よさとして感じ取ってきているのではないだろうか。また、保育者がクラスの子どもたちに伝えていこうとする言葉や気持ちを、今の時期時期の子どもたちであるからこそ大らかな気持ちで受けとめ、そしてじぶんたちなりの表し方でA児を包みこんでいこうとする一人ひとりの思いが感じられた。

事例3、たんぽぽさんは“七色ハート”だよ

これまで、子どもたちとの話し合いの場で「気持ち」「ころ」「ハート」と、いった言葉で語り合ってきたたんぽぽの学級であった。そんなある日、しんじが「せんせー、これ、せんせいにあげる」と、もって来てくれた紫色した小さなハートのガラス石に糸を通したペンダント。保育者がその石のハートを着けていると、すぐさま子どもたちの目に止めていった。「わー、せんせー、このハート、きらきらひかっているよ」「いろんないろにみえるねー」と、嬉しそうに思いを言い合いながら、ペンダントに触っていく子どもたち。そんな子どもたちの姿から、集まりの場でこのペンダントの“ハート”について、みんなと話し合っていくことにした。

(1) 七色のハートとは

- ① たんぽぽさんにはいろんな人が集まっている
- ② 一人ひとり、顔も声も髪の毛や形、洋服も、手の大きさも違う
- ③ 「あれがいいなー、これがいいなー」と、一人ひとりの考えも違っている

このような話し合いの中で、こうじが持ってきてくれた“ハート”も、いろんな色を混じり合わせて光って見えることを教えてくれた。そして、この色と色のぶつかりあいがキラキラ光り輝ききれいな“ハート”になっていること。

(2) 子どもたちが受けとめ受け入れていった“ハート”の意味

2月21日／砂場－（特別実習、田中教生の記録を原文のまま引用）－

尚、幼児名は仮名に置き換えてあります。

あきらくん、まほくん、みき子ちゃんとひろ子ちゃんと一緒に砂場で川づくりをして遊んでいました。大きな川をつくっていたので、たくさん水が必要でした。そこで、みんなが順番に交代しながら水道に水を汲みに行くことになりました。水道では、こうきくんが自転車のタイヤを洗っていました。こうきくんは、昨日、川をつくっていたので、つちの掘り方を教えてくれると言って、遊びに加わりました。少しの間、掘っていると、こうきくんが私に土を投げました。注意してもしつこくやってくるので、逃げていると、ひろ子ちゃんとかず子ちゃんがやってきて、かず子→「先生、着替えもってないから、汚しちゃだめなんだよ」と、こうきくんに注意してくれました。なかなか止めないこうきくんを見て、ひろ子→「先生嫌がっているよ、嫌なことしたら、それはいじめっていうんだよ、やめてあげて」と、必死に説得してくれました。

かず子→「そんなにいじわるしたら、たんぽぽのハートはひとつになれないんだよねー」と、急にハートのお話が出てきました。こうきくんは、それを聞いてやめました。こうきくんがいなくなった後に、二人は、ひろ子→「たんぽぽのハートはみんなが仲良くしないと一つにはなれないんだよー、そうだよね」。かず子→「たんぽぽのハートは、七色ハートなんだよ、みんないろんな色で、きれいなきらきらの色、七色にきらきら光るんだよ」。そして、また砂遊びにかえりました。

♥こうきは仲良しになりたい、関心を持っていることを伝える手段として、今までもこのような、言い換えれば乱暴とも取れる方法で自分の気持ちを表していた。そんな中で、なんでも言い合えることが出来だしたクラスの仲間から、自分のしたことに注意を受けていった。初めは聞く耳をもたないような素振りをしていながら、「たんぽぽのハート」「一つにならないよ」「七色ハート」と、言った言葉を聞いたとたん、自らの判断で今している行動にストップをかけて行った。クラスのみんなでいつも話し合っている“ハート”“気持ち”という言葉に自分の気持ちを重ね合わせていこうとするこうきの姿がある。そして、なによりもクラスの子どもたちが保育者と思いを同じにしていこうとしている姿が、この記録から読み取ることができるのではないだろうか。

(3) A児の変容—6期から10期の姿

- ① 自分の居場所さがしと、特有なこだわりを持ちながら転々と歩きわたっぺいこうとした。
- ② 「おはよう」と、返事を返してくれるようになる
- ③ 自分のロッカーにカバンを収めていくようになる
- ④ 丸テーブルに近寄ってくるようになる
- ⑤ あき子へのこだわりと関心を見せはじめる
- ⑥ 抱っこすると、そのひと時の時間を周りの子どもたちと同じように過ごして行くことができはじめる。(誕生日会や集まりなど)
- ⑦ ピアノが聞こえると保育室に入ってくる—(アンパンマンの歌など)
- ⑧ クラスの子どもたちが積み上げていく積み木を倒していく行為を見せはじめる
 - ♥A児が「叩く」「押し倒す」などの、迷惑・危険と感じる行動や行為をしたときには、やさしく「やめてね」と、伝えていくことを子どもたちと話し合っていく。
- ⑨ クラスの子どもたちと同じ場で過ごしていく—ままごとコーナーや絵本の場、迷路の場
 - ♥T児の興味ある沢山の物が溢れている事務室から意識的にクラスに抱きかかえていくことが多くなった。
- ⑩ 集まりに自らの意思で保育室や円座の仲間の中に座っていくようになる
 - 課題活動への参加—劇遊びや絵画、粘土遊びなど
 - ♥保育者が其の場に応じながら気持ちを向かわせるための意識的な言葉をゆっくりと、気長に掛けていくことを心掛けた。自然な形で、学級の子どものたちの中で活動・参加していく。女の子への親しみや関心を「抱きつく」行動・態度で表していくようになった。
- ⑪ 保育者が意図したテーマに添って、自分の言葉で表現し、みんなの前で話ができはじめる
- ⑫ 周りの動きを気に掛けながら、保育者や友だちが話す言葉を自分なりに受け止めていくとする

II まとめ—響きあう姿とは

子どもたち一人ひとりが、学級の中で今、自分がここで何をしていけばいいのか、何をしてあげればいいのか、という思いをもつことがとても大切な事ではないかと感じてきた。2月27日、片付けをし終えた子どもたちが、自らの判断で雑巾掛けを始め出した。驚きながらも保育者は、子どもたちを一斉に廊下に集めた。「いちについてー、よーいどん!」と、一斉に並んでスタートしながらの雑巾掛けを提案し、試みた。そんな学級の姿に関心を寄せはじめたのだろうか。懸命に、競い合いながら廊下の雑巾掛けに直向な勢いを見せて行く子どもたちの後ろから、ズボンのポケットに手を入れながら、黙々と歩き進んで行くA児の姿があった。9期の頃には全くといって良いほど見るのできなかったA児が、仲間と一緒にいる姿がある。このときA児はいったい何を考え、思いながら、みんなの後を歩いていたのだろうか。A児は、ただ歩いていただけだったのだろうか。興味や関心がなければ、勝手に逃げて行くA児であっ

たはずである。だとすれば、クラスの仲間たちが楽しそうに並び、スタートして行く「雑巾掛け」に、A児なりの思いを抱き持って参加していたのではないか。今、まさにA児は、みんなのしている楽しさを自分で確かめ、感じ取っていかうとしている。子どもたちはこの後、顔をぼかぼかさせて、白帽子になっていった。

自分が自分の行動に気持ちよさを感じる事、そして、その感じた事を仲間たちはどのように感じてくれるのであろうか。と、考えながら、相手の思いを受け止めていかうとし、そして感じていったことを、自分の中にしっかりと受け止めていかうとする。この、たゆまない繰り返しの中で、互いの気持ちの中に知らず知らず溜め込んでいったもの、すなわち、「一人ひとりの自己表現を互いに受けとめ受け入れていく関係」が築けるのではないだろうか。

日々の保育の、ほんの些細な行動・活動の中にこそ、また、子どもたちが本音で発散しあうて行くエネルギーの中に、一人ひとりが表出し合う気持ちのいい空気が流れ、どこか遙かなたで混ざり合い、より透き通った空気となって互いの身体に吸い込まれていく。

ここに、いろいろな人の中で、そして、一人ひとりが大切に生かされながらかわり、響き合って生活していく子どもたちがいる、と考える。

Ⅲ 今後の課題

あまりにも多くの課題があり、日々の保育はこれでいいのだろうか、子どもたちは物足りなさを感じているのではないだろうか、という思いとあせりが交差していったのも事実であった。また、学級の中で特に課題を持ち続けていったA児やB児について、一人ひとりの子どもたちが自分なりの受けとめや考えをしていかうとし、また、話し合いの場で、互いの気持ちを素直に表しあい、自分の思いを再構築し、相手に寄り添っていかうとする姿に変化していった。これらの一つひとつの課題には、これから先もまだまだ、し尽くすという事はなく、日々の幼稚園生活の中でしなければならない課題は沢山残っている。このことを再吟味しながら、年長の一年間を、さらなる成長の場としていくことを願っている。

●ここに、「たんぽぽのうた」を、記して終わりとした。この歌は、たんぽぽへの思いをしおりが言葉にしてきてくれたことから出来た。そして、その言葉にA児の父親が曲をつけてくれた。4歳時最後の思い出を、この“たんぽぽのうた”に託しながら、子どもたちは素敵な歌声を披露してくれたことも付け加えておきたい。

♪きみに すまいる わたしに すまいる
おんなのこに すまいる おとこのこに すまいる
これからが すきになるね みんな ともだちだ
みんな だいすき みんな だいすき
きみに すまいる わたしに すまいる、
これから わすれない だから すまいる♪♪